be between 読者とつくる

家でもミネラルウオーター飲む？

水はもうタダじゃない

「日本人は水と安全をタダだと思っている」。約40年前のベストセラーで指摘され、つい最近まで何とか通用していたはずの日本人論です。が、東日本大震災と福島第一原発の事故の後となっては、郷愁を呼び覚ます昔話のよう。今回も家庭でミネラルウオーターを飲む人がほぼ4割に達しました。

野菜に牛乳、魚介類、牛肉……「3・11」以来、食の安全を脅かすニュースが次々と流れる。中でも、東日本各地の浄水場から放射性物質が検出され、一部で乳児の摂取制限が実施されたことへの衝撃は大きかった。

「安全でおいしい水がタダで手に入る日本に住めて幸せと思ってきた。その前提が崩れた」（千葉、54歳女性）

「海外旅行で水もワインも同じ値段で驚いたが、まさか日本でこんな時代が来るとは」（東京、62歳女性）

「普通に飲める水が容易に得られることが、いかにすごいことだったか気づかされた」（東京、61歳男性）

日本では初めて直面する事態。平常心を失い、水を買いに走る人も多かった。

「震災後、買いだめはしないようにしていたが、見る見る間にスーパーの棚のミネラルウオーターが減っていくのを見て、1箱6本入りを買ってしまった」（埼玉、47歳女性）、「東京から消えた水を、西日本に出張した際に買った。そこでも購入制限はあり、売り場とレジを何度も往復した」（東京、54歳男性）

摂取制限はすべて解除されている。被災地でも、「もう悩まずに浄水器を通した水道水を飲む」（福島、52歳女性）という声があった一方、乳幼児がいる家庭では、首都圏でも不安が続く。

「子どもが小さく、夫はミネラルウオーターを炊飯や調理にも使用すべきだと言うが、経済的な理由から飲料のみ」（神奈川、45歳女性）、「保育園に通う子の飲料と汁物にミネラルウオーターを使う。やめるタイミングが難しい」（千葉、39歳女性）。

もともと、ミネラルウオーターの売り上げが伸びたのは、安全性を求めてというより、「都市部の水道水はまずい」（広島、47歳男性）といった評価が定着したためだとされる。ただし、味に関しては、処理技術の向上で水道水の巻き返しも目立つ。

「大阪市の水道水は以前と比べ、ずいぶんとおいしくなった」（大阪、50歳男性）、「以前は浄水器を使っていたが、最近水道水が大変良くなったので、そのまま飲むことも」（京都、76歳男性）。

市販のミネラルウオーターは、ほとんどがペットボトル入り。将来を考えれば、少々堅苦しさを感じる正論にも耳を傾けるべきだろう。

「ペットボトルという化石資源の無駄遣いに無頓着な人々が、脱原発を求めるのは矛盾ではないか」（神奈川、77歳男性）。（坂本哲史）

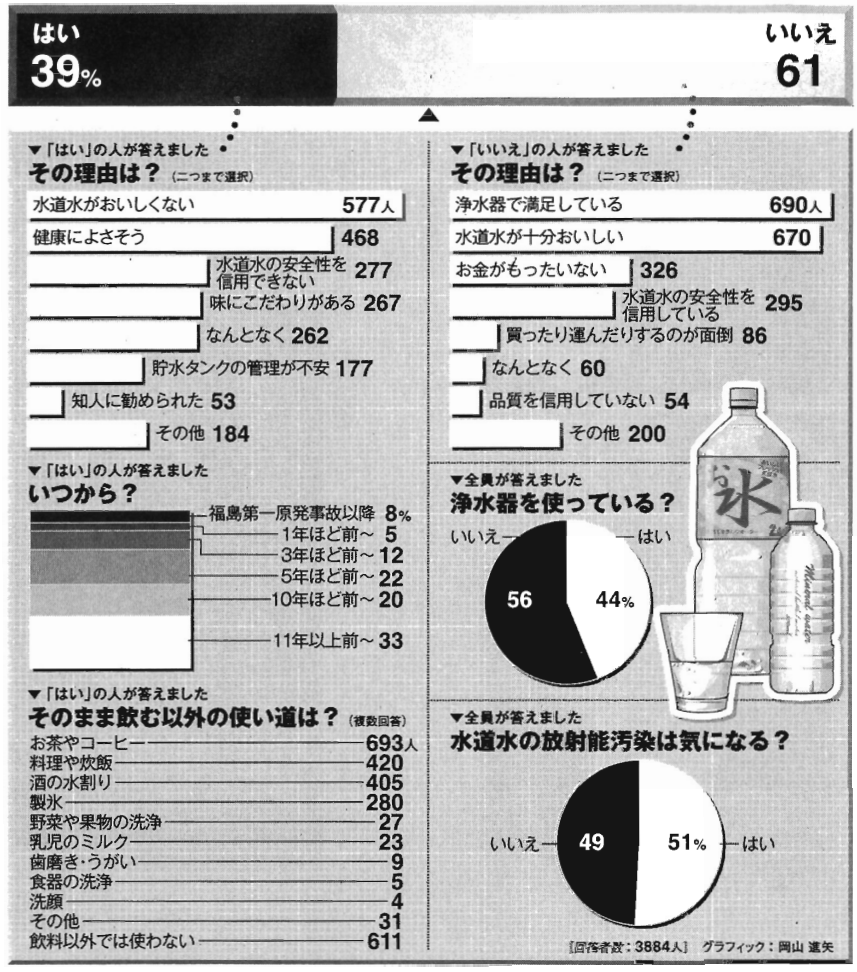
20年かけて根付いた

タダと言われた水を買うことに、日本人が抵抗をなくしたのはいつからか。

水問題に詳しいジャーナリスト橋本淳司さんによると、家庭用ミネラルウオーターが業務用を追い越したのは1990年。断水が懸念された「ミレニアム」を前に、備蓄用の需要が高まった99年にも、売り上げを大きく伸ばした。「アンケートでも、原発事故前から飲み続けている人が目立ちます。ペットボトルの水は20年かけて、日本人の生活にすっかり根付いた」

もちろん、過剰な依存は禁物。でないと、何かあるたびにパニックが繰り返されかねない。そもそもミネラルウオーターは価格競争が激しく、メーカー側は一時的な需要増に対応した増産に及び腰だという。日常的には、沸かしたりくみ置きしたり、水道水をおいしく飲む工夫も大切だ。

「ただ、安全と安心は別物。乳幼児を持つ親御さんたちが、水道水がいくら安全だと言われても不安なのは当然です」



beモニター（朝日新聞アスパラクラブ会員のうち1万7千人が登録）へのアンケートをもとにした企画です。モニターは随時募集します。